

# 避難路確立 アプリで学ぶ

## 火事・電線切断…画面に「不測の事態」

新宿区立愛日小学校（矢来町）の児童たちが、タブレット端末を使用しながら、災害時のハザードマップ作成や避難経路を確立する学習を行っている。小路の多い地区で、フィールドワークを重ねて、防災意識を高めるのが狙いだ。

### 新宿の小学校

「こっちの道は細いから行くのをやめよう」「でも、時間がかかるよ」14日前、交差点に出る度、同小5年の児童たちが話し合った。道を決めて進むと、タブレット端末から火災の知らせが。また別のルートを探すことになった。



避難ルートを確認する児童ら（14日前、新宿区で）

この日、学校周辺で行われたフィールドワーク。自宅近くから避難所の小学校を目指す途中で、特定の場所に進むと、地図と連動した端末のアプリが、火事や壁の崩落、電線の切断などを音声や画面表示で知らせる仕組みになっている。

決められた時間に決められたルートを取るのが通常の訓練とされるが、いざ災害が発生した際は、二次災害への対応力も必要になる。不測の事態に対する判断力を、子供たちが楽しみながら養えるようにと、東京都大（世田谷区）の研究チームがアプリを開発し、同小の総合学習の時間に協力する形で授業が実現した。

昨年度は、研究チームが作成した別のアプリを使って、児童たちは地図に消火器や消火栓の場所などを地図に記したハザードマップ

を作成。今年度は、災害発生時に避難所となる小学校までを自宅近くから実際に歩き、最適ルートを考えることを目的としている。

14日は、10グループに分かれた児童たちが、途中で起きる災害に行く手を阻まれながらも、安全な道はどこかを議論しながら答えを導き、判断理由をメモに残

していた。参加した5年の長岡彩奈さん(11)は「狭い道や、木造建築が多い町だと分かった。災害時にも役立つたい」と話した。

案内役として参加した同大大学院1年の白井大亮さん(23)は「日頃の防災意識向上にもつなげてほしい」と話していた。

●この記事・写真等は読売新聞社の許諾を得て転載しています。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。